

純粋な美術熱情、国境を越え‘別に、また、共に’

釜山・福岡代案空間



自由を夢見る美術人たちのつよい紐帯は国境を無色化する。アートインオリ展示場の前で笑顔いっぱいの代案空間日・韓交流展の参加作家たちと展示開幕行事。

地域作家たちの交流展活発

—自由な作家精神が海を越えてお互いに通じあった。韓国と日本の小さな町外れにある作家村であり **alternative space** であるオリと千代福が純粋な美術熱情一つで力を合わせた。これらの作家たちはまさにお互いの作業に靈感を与え、作家たちを両国に紹介する実際的な連帯に進む態勢だ。交流展の現場に参加した。

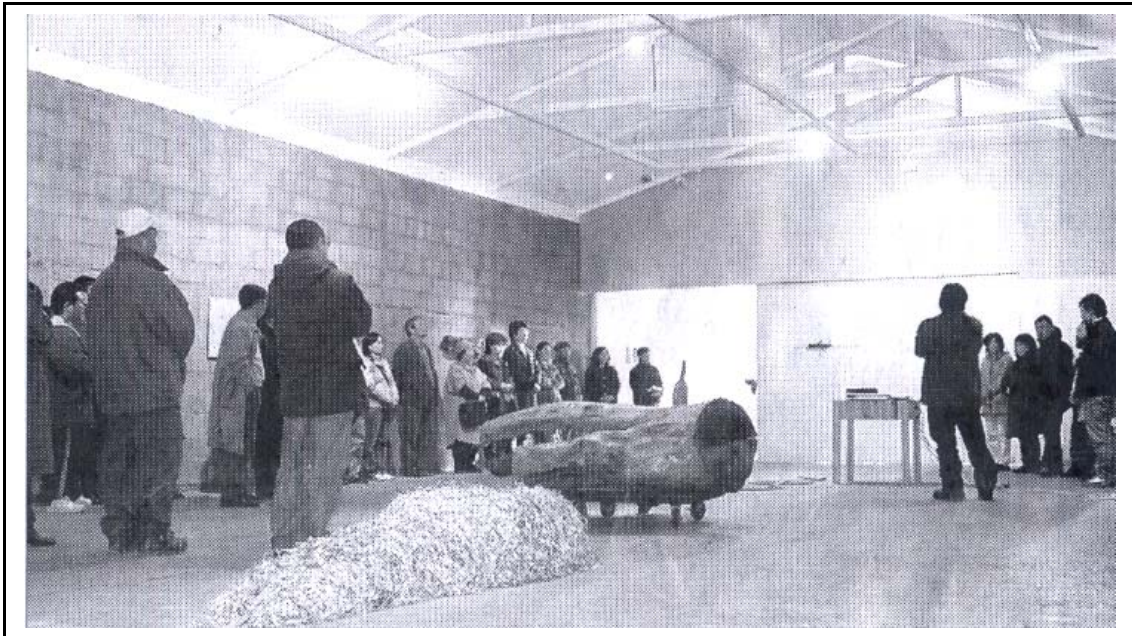
#国境を越えた連帯感

“釜山市のモットーのようにダイナミックな生き活きが印象的です。” “スケールの大きさと溢れるエネルギーにビックリしました”、“作家たちも風景も日本に似ている所が多いから親しみを感じます”、“実際的な交流をもっと拡大して持続させたいものですね”

晴天の18日、釜山の機張郡 Jang-an 鴨、共同創作村アートインオリの展示室。日本の福岡久留米市の‘アートスペース千代福’所属美術家7人と‘アートインオリ’の作家12人が共同で作る作家交流展の場である。

前日、代案空間バンティー、クラフトストーリー、オムテイクギャラリー、釜山市立美術館などを回った5人の日本の作家たちが釜山—釜山美術に接しての印象は熱か

った。彼らの目に映った釜山美術は‘ダイナミック’、‘エネルギー’に要約されるようだ。しかし、何より彼らは“作家が直接共同創作村と展示室を運営し、自由に作業をする風景は私たちと異なるところはない”とアートインオリに心を奪われた様子だ。日本の作家たちは斧で作った小ぢんまりして可愛い木彫作品と鳥の羽の形をした洗練されたペーパーナイフを韓国の作家たちにプレゼントしたり、勝利の神様がついてあるキーホルダーをひとつずつ配ったりした。韓国の作家たちは機張の市場から買って来たわかめとかまぼこ、肉、貝、団栗で作られたムク、豆腐、いちごなどの食べ物をオープニングイベントの後に配る愛嬌も忘れなかった。完全に話が通じることはできないが隔たりなく、親しく付き合う様子で芸術家たちの血は一つになった。作家たちは誰からともなく声を張りあげた。“乾杯”



展示開幕とセミナーの様子

質実的な美術交流、地域から出発

昨年、初交流展を始めたため交流の年輪は決して長くはないが、このような愛情こまやかな友情はどこから始まったのであろうか？“アートスペース千代福”はアートインオリと色々な面で似ている。福岡の久留米市郊外の離れた所に位置するという点、昔の酒造場であった建物をそのまま活用したこと、作家たちが自ら展示室と文化の空間を作り出している所などがそうである。以前2003年3月‘アートスペース千代福’のメンバーである石井香久子さんがアートインオリの‘日本4人展’に参加したのがきっかけで縁が始まった。アートインオリの作家たちが昨年1月‘アートスペース千代福’に招待されて現地ではじめて展示会を開いて、その後千代福とオリの本格的な交流が立ち上がったのである。しかし、交流の方向は郵

便で作品を送るだけや立ち寄って帰る食あたり気味な海外交流展のそれとははつきりと違う。作家たちが運営するという点だけあって、オリと千代福が感じる共感帯は相当部分一致する。

‘アートスペース千代福’代表を勤めている新庄良博さんは“私たちは周りの視線とか気にしない。ビエンナーレとか美術館など大型キュレータたちがこれまで見たことがないところからの企画も可能である。製作も共にし、ディスプレイもお互いに手伝って、作家の発掘も行う持続的なプロジェクト的性格の展示をアートインオリと共に飾れることを期待する。と言った。アートインオリの村長であるパク・ウンセンさんも“地域の作家たちをお互いに紹介する橋渡しの役割および、ネットワークの形成、お互いにインスピレーションを取り交わすコミュニティとして積極的な指向点を探っている”と交流の意味を披露した。交流展の実質的な産婆役を受け持ったキム・ジョンジュさんは“千代福側が今年8月に予定されている日本での交流展でオリ側の作家たちに全幅的な支援を約束した”と伝えた。似たりよったりの海外交流展が指向なく浮遊している美術場で、日本と韓国でそれぞれ自生した代案的性格の二つの空間が自発的ネットワークを形成させた事実はその意味が特別である。その連帯の土台はまさに作家的純粋さと熾烈さだろう。

#お互いにインスピレーションを取り交わす

今回、展示に参加した日本の作家たちのジャンルは絵画、木の切れ端、鉄切れ、陶芸、繊維、パフォーマンス、インスタレーションに掛かっている。日本の作家たちは短い時間に接した釜山の美術からひそかにインスピレーションの裾を掘り出すのに余念がない姿だった。津田三朗さんは“女性作家たちが作品を大きく作り出す力に驚いた”、北田明子さんは“目的意識が高く、心に伝わって来る表現力がいい”と言った。

“alternative space の風景が全世界的に似ている様子で親近感を感じて専業作家として黙々と働くアートインオリ作家たちが先輩として羨ましい。”という坂井さんと新庄さんの賞賛もあった。

日本の作家たちの作品では多様であり洗練された深さが一貫して感じられる。新庄さんはアートインオリの周辺に捨てられてある松の木を材料にして現場性と即興性を強調した作業で特別な注目を引いた。質朴な質感の感覚的木彫と小物の絶妙な対比を創り出す彼の作品は魅力的である。それ以外にも廃ゴムと廃木彫刻のインスタレーション（坂井さん）、廃破砕紙を繊維と結合させた感覚（石井香久子）玉模様の抽象絵画連作（北田明子）、丸い鉄板を利用した鉄の彫刻作品（津田三朗）、抽象と具象を行き来するすんなりしている木の彫刻（石川幸二）、正ピンを感覚的になじった陶器の作品（松尾伊知郎）を出会うことができる。一方釜山の作家ではジョン・ジンユン、キム・ジョンジュ、パク・ウンセン、ソ・サンホウ、シン・ムキ

ョン、ムン・ビョンタク、パクインジン、アン・ゼグック、キム・キョンホ、キム・チャンス、ゴ・ミンチョル、ジョン・ドンミョンなど12人が自分の世界がはっきりしている彫刻、設置、写真らの作品を展示している。

展 示 は 27 日 ま で と な っ て い る 。

キム・コンス 記者

* ‘アートスペース千代福’ 新庄良博氏

縛られていない活動共感帯’



ーアートスペース千代福を紹介してください。

▲日本福岡久留米市の南方面である千代福に位置する。アートインオリも田舎の閉畜舎を改造して使用していると聞いたが、千代福は古い酒造場の建物を活用したものである。2002年の地域作家たちが“古い建物を文化財として育てられ、その場所を複合文化空間に育てよう”意気投合。現在40～50代作家7名が共同で出資して運営中である。市からの支援は全然なく、すべてを自身で解決する独立空間の性格が深い。建物は2階で展示室とワークショップ及び体験空間などで構成さ

れており、建物周辺に作家たちの個人作業室が散らばっている。

ーどんなプログラムがあるのか

▲ 空間は地域住民のためのセミナー、共同作業ワークショップをする場所、陶磁器の体験空間として使われている。精神的な障害を持つ人々のため美術プログラム、各種講習会もある。現在、美術展示会は勿論、演劇、舞踊、伝統音楽、パフォーマンス公演など多彩な行事が開かれている。複合的な文化空間として地域住民のための教育の場、疎通の場として機能させたい。

ーアートインオリとの交流の意味は

▲ 私たちと似たような環境と目的を持った空間が釜山にあることを知って不思議で驚きがあった。制度圏で出来ないことを自由に企画できる部分からお互いの共感帯を形成し、実質的な交流の期待感を高めている。これからは写真、映像など、現代美術の核心ジャンルに属するメンバーを新しく迎え入れて千代福の希望とする予定だが、その面でアートインオリとの連帯もさらに深まってほしい。

キム・コンス 記者